

徒然の記 その七

灯火管制(とうかかんせい)]

「とうか」と聞くと、戦争中の灯火管制のことを思い出してしまいます。火の話から少し脱線してしまいますが、当時のことを書いてみました。

「宮田さーん！ 明かりが漏れてるよーッ」

外で警防団のオジサンが大声で怒鳴(どな)っている。国民服を着たオジサンは、鉄兜(てつかぶと)を背負い、脚にはゲートルを巻き、頭には戦闘帽を被っている。

…明かりが漏れると夜空を飛ぶ米軍のB29(当時世界最大の爆撃機)に人家の所在を知られてしまう。

夜間に空襲警報が発令されると雨戸を締め切り、電気の傘の上から黒い大きな布を被せて外に光が漏れないようにしなければなりません。

気をつけてはいるのですが、時々、布の合わせ目や雨戸の隙間から光が外に漏れてしまい、町を巡回中の警防団のオジサンの叱声(しっせい)を浴びることがありました。

若い人には、警防団とか国民服とかゲートルなどの言葉は馴染(なじ)みがないと思いますので、簡単に紹介しておきましょう。

警防団＝戦時体制下、民間の消防や防災・防空のために組織された団体。1934年(昭和

14)結成、1947年廃止。…当時、若者は兵役についていたので、団員のほとんどは中年以上の人でした。

国民服＝1940年(昭和15)、国民の着用すべきものとして制定された服です。

軍服に似た形の男子服のほか、女性(女学生)用のものもありました。…北朝鮮の歴代の首相が着ているあれです。

かつては中国人も着ていましたが、開放経済の浸透(しんとう)と共に急速に姿を消してしまいました。

ゲートル＝ズボンの裾をおさえて足首から膝まで覆うものです。多くは軍服用で、一枚の厚布や皮革製で、脇でとめるものと、小幅の布を巻きつける巻きゲートルがあります。

日本では後者をいうことが多いようです。

…父も外へ出る時は、いつもゲートルを巻いていました。

使い終わった包帯のように、外したゲートルを、きちんと巻いておくのは子供たちの仕事でした。

鉄兜＝薄い鋼鉄で出来た帽子…戦場などで、頭部を守るためにかぶる、鉄製のヘルメットです。

戦闘帽＝日本の軍隊で戦時にかぶった布製の帽子、略帽です。

当時の日本の社会では、成年男子は警防団、女子は婦人会に組み込まれ、家庭は隣組によって行政機構の中に取り込まれ、国民はがんじがらめの統制を受けていました。